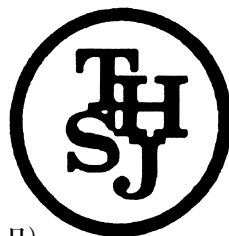


日本ハーディ協会ニュース
NEWS from THE THOMAS HARDY
SOCIETY OF JAPAN



第79号 (2016年4月1日)

発行者 〒162-8601 東京都新宿区神楽坂1-3
東京理科大学1号館1603A研究室内 日本ハーディ協会
編集者 〒811-4192 福岡県宗像市赤間文教町1-1 西村 美保



Wightwick Manor

(提供：西村美保)

J.M.バリーとトマス・ハーディ
—なぜハーディはピーター・パンを無視したのか—

金子 幸 男

1928年1月16日、ハーディの灰が、ウェストミンスター寺院の「詩人のコーナー」に埋葬されたとき、棺をかついだのは、ジョン・ゴールズワージー、サー・エドモンド・ゴス、A.E.ハウスマン、ラドヤード・キプリング、ジョージ・バーナード・ショー、J.M.バリーであった。錚々たる文人の中、バリーはハーディの親しい友人の一人であった。ハーディ臨終の際、バリーはサー・シドニー・コカレルとともに駆けつけ、葬式の手配をしている。すなわち心臓をスティンズフォード教会に眠る第一夫人のエマと同じ墓に埋葬し、火葬後の灰はウェストミンスター寺院に埋葬するよう手配したのである。

これほど面倒見がいい友人であるのに、どういうわけか、ハーディがバリーに宛てた手紙

(Purdy and Millgate, *Collected Letters of Thomas Hardy*) を読んでみると、どれもそっけない短いものばかりである。これはゴス、コカレル、エドワード・クロッド、フローレンス・ヘニカー夫人に宛てた手紙と比較するとよくわかる。いくつかバリー宛の手紙を列挙してみよう。ハーディはロンドンの王立美術院のディナーにキップリング、バリーとともに参加 (4th May, 1911)。バリーからある劇の検閲に反対する署名をお願いされて署名 (3rd & 9th Feb, 1912)。准男爵に叙せられたバリーにお祝いの言葉を贈る (3rd June, 1913)。第一次大戦開始の1914年、政治家・文筆家C.F.G.マスターマンによりウェリントン・ハウス に呼ばれたハーディ、バリー、ゴールズワージー、チェスタートン、アーノルド・ベネット、H.G.ウエルズらは、国に何らかの貢献をするよう促される (Millgate, *Thomas Hardy: A Biography Revisited* 461)。この件についてはバリー宛の手紙はなく、ゴスをこのグループのメンバーに推薦したことを知らせるゴス本人に宛てた手紙が残っているくらいだ。またハーディはバリーに同行してフランス戦線で士気を鼓舞する役目は、高齢を理由に断る (23rd June, 1917)。フレデリック・ハリソンが『テス』の舞台上、ガルトロード・ビューグラー夫人を使いたいので、条件の交渉をするエイジェントを紹介してほしいと、ハーディはバリーに依頼 (19th Dec, 1924)。ちなみにビューグラーは1913年16歳のときに、劇『森林地の人々』でマーティ・サウス役を演じていた。要するに演劇ほか公的な手紙が多く、バリーの私生活にまで踏み込んだ手紙が一つもないのだ。

これほど愛想がない手紙ながら、ハーディの心の微妙な揺れが感じ取れなくもないときがある。それは、バリーが後見人となったルウェリン・デイヴィーズ家の子供たちに言及するときである。デイヴィーズ家は『ピーター・パン』中、ダーリング家のモデルとなったが、若くして父アーサーと母シルビアが病没し、以前から一家の親しい友人で特に5人の子供たちに人気のあったバリーが引き取って育てていた。ハーディは、フレデリック・マクミラン宛の手紙で、ロンドン行きを延期した理由を、滞在先のバリー一家が不幸に見舞われたからであると言う。バリーのお気に入り、四男マイケル・ルウェリン・デイヴィーズが溺死したのである (22nd May, 1921)。このマイケルが生前書いたソネット2編が『タイムズ』紙 (17th June, 1922) に掲載されると、ハーディはバリー宛に称賛の手紙を書いているが、短いそっけないものである (17th June, 1922)。長男ジョージの戦死も存知であろうからバリーの私生活に寡黙なハーディは相手への気遣いとも考えられるが少し気にはなる。さらに言うと、ハーディはピーター・パンについては言及したことがない。1901年初演、その後もクリスマスになると上演され、物語版は1911年出版、28年戯曲が出版されたこのエドワード朝を席卷し、その後も人気を誇ることになる作品についてハーディは沈黙するのだ。これは、90年代にイギリスに登場したイブセンの劇には敏感に反応したのと対照的だ、子供向けの劇に過ぎぬと無視したのであろうか。

ピーター・パンは一般に「永遠の子供」のアイコンとして、永遠の若さを象徴する神々 (パン、イカロス、ディオニュソス、ヘルメス) の系譜にあるものと考えられてきたが、ピーターはネヴァーランドのロスト・ボーイズたちが喜んでダーリング家の養子になるのに対して、自分はそれを拒絶する。学校、会社、教会が体現する制度に組み込まれ、大英帝国のイデオロギーに奉仕するのが嫌だからである。一定のアイデンティティと引き換えに自由と遊びの精神を失うのが嫌なのだ。子供の形象を社会批判に使うのはロマン派の詩、ディケンズをはじめとするヴィクトリア朝小説家の常套手段であるが、この子供向けと思われている『ピーター・パン』は帝国主義批判、社会制度批判の書として大人向けの書でもある。

ハーディにおいて子供の描写が中心を占めることはあまりないが、『ジュード』における子供／老人であるリトル・ファーザー・タイムだけは、ピーターと同じく制度批判を担わされている特異な存在である。ギリシア神話の破壊的な時間の神クロノス (時の翁) の系譜にあるファーザー・タイムは、社会から望まれないがゆえにスーとジュードの子供二人を道連れに自殺す

るが、その破壊的行為に、階級制度、結婚制度、宗教制度批判のすべてをこめている。ファーザー・タイムの暗いグロテスクな子供／老人像は、『ピーター・パン』中の明るい健康的な子供像とは対極にある。この違いはどこから来るのだろうか。一つには子供のいないことを苦にしていたというハーディが、明るい子供の笑いが聞こえてくるバリーのような家庭は想像できなかったということが言えるだろう。さらには、世紀転換期はジェンダー、セクシュアリティ、階級、民族、ナショナリティ、年齢等、どの一つを取ってみても境界線が曖昧化しつつあるアナキーの時代であった。そのような時代において制度批判をしようとする、ハーディはピーター・パンのような明るく生意気な子供のエッセンスではなく、ファーザー・タイムのような子供／老人の形象を生み出すしかなかったのであろう。

ハーディの戦争詩

押 本 年 眞

ハーディについて何か書けと言われると、それほどハーディを読んでいないにしても、近年刊行されているトマス・ハーディ全集の故大榎茂行氏訳『エセルバータの手』をはじめ『日陰者ジュード』、『森林地の人々』等を読み、『帰郷』、『ダーバヴィル家のテス』の原作を読み直し、また今も出講している大学で毎年ハーディの中短編を扱うので、留学生も含めた受講生の反応など書く材料を多少思いつかないわけでもない。

だが昨年、それ以上に思いがけないきっかけでハーディにつき再考してみようと思うようになった。昨年は戦後70年ということで例年にもまして戦争中の経験と戦後の日本の歩みを振り返る行事があったようだ。そこには、体験を継承する難しさ、風化への怖れと安保健制をめぐる議論の高まりも背景にあった。

私は知人に誘われて、八月初旬京都で開催された戦争経験を語り継ぐ会に出席した。これは、ある新聞の投書欄に戦争中の経験につきよく投書された人びとが中心の会だった。

その会に大阪から出席された93歳の元海軍兵士の話は印象深かった。軍国少年で当然のごとく海軍を志願されたその方は、1942年に空母・飛龍でミッドウエー海戦に参加、米軍の壮烈な攻撃を受け銃弾を背中に受けながら生還した後、さらに南洋のトラック島で戦い餓死寸前に陥った話をされた。氏の前後左右で戦友が撃たれ倒れていったという。氏は斃れた戦友の痩せこけた亡骸を、お互いに体力の弱った仲間と共に、棺を用意することもできず浅く土を掘って埋め薄く土をかけて弔ったという。その間中、敵の攻撃を受ける恐れがありながら。「棺も無く薄く土をかけられただけの戦友は、今は南の島の土と樹になっているでしょう。」と述べられたとき、私は思わずハーディの「鼓手のホッジ」*（詩番号60、以下括弧内の数字は詩番号）を思い出した。ウェセックスで農業に携わっていた男は思いがけずポーア戦争に駆り出され、周りの者から田吾作と低く見られながらも戦い斃れ、棺も無く埋葬された。無論、墓とてなく最後の地を示すのは、故郷でなじみの小高い平原（downs）とは似ても似つかぬ異国風の草原に目立つ小丘のみ。戦争の意義も南アフリカの光景が何を意味するかも知らずに死んだホッジの上には南半球ならではの星が輝き、その胸と頭脳は南国の樹の一部となっているという詩とひどく似ている印象をうけた。

講演された方は、軍国少年として熱い想いで志願され、激戦を経験されたのだが、つくづく国の上層部、上官たちの無責任さも痛感されたようである。講演の締めくくり部分では「戦争にな

れば国は国民の命なんか守ってくれない。」と強く言われた。

この講演を聞いた前後に、森松健介氏の『イギリスロマン派と緑の詩歌』（中央大学出版部 2013）を読んだ。その中で『霸王たち』から次の一節が引用されていた。イギリスがナポレオンに対抗させた同盟国軍が大敗したことに驚愕した首相ピットが、「アウステルリッツってどこだ」と地図をのぞき込む。「—だがその場所がどこだろうと、何の役に立つ？／どんな死体が埋葬地の緯度経度を知ろうと勇み立つ？／また、墓場の環境に好奇心を抱いて騒ぎ立つ？……」（第一部第六幕六場）

また同じ頃、日本文学者ドナルド・キーンの半生を扱ったテレビ番組を偶然見て、第二次大戦中キーンに強烈な印象を与えたアッツ島での日本兵全滅の惨状を知った。

まことに、歴史に残るほどの戦争の激戦地の地名はいろいろある。だが、考えてみればそれらはどこにあるのだろうか？トラック島、アッツ島、インパール、ルソン等よく聞くのだが…。こんなことを言うのは、私は戦後の雰囲気や濃厚な記憶をかなり持ってはいるが、「戦争を知らない子どもたち」の一人でもある微妙な年代であるからかもしれぬ。だが、私より上の年代の方でも、1805年のピット首相のように、「そこはどこにあるのか。」と言う人も多いのではないかと思う。

筆者は1982年4月にアルゼンチン沖のフォークランド諸島の領有権をめぐるイギリス対アルゼンチンが戦ったフォークランド戦争の際に、勤め先の在外研究員としてイギリスに滞在していたので、テレビ・ニュースで流れたサウサンプトンの軍港から兵士が出ていく光景、突如夫の戦士の報を知り悲しみに暮れる若妻の姿が、ボーア戦争に関連する「出航」（55）、「砲兵隊の出立」（57）、「ロンドンに残された妻」（61）を読むと思いだされる。

ハーディはまた、詩番号493-509において、第一次大戦にかかわる詩を書いている。さらにハーディには、少年時代から関心をもったナポレオン戦争に関連して「農夫の懺悔」（25）、「非常招集」（26）といった詩もある。これらが、彼の他の詩、劇詩『霸王たち』、小説『ラッパ隊長』とどのような関係にあるか、現代を考えるのにどの程度意味があるか、少し考えてみようと思っている。

* 'Drummer Hodge' の詩句については、森松健介、上山泰両氏の訳を参照した。また、ハーディの詩の日本語訳題名はトマス・ハーディ全集15-1巻に従った。

ハーディと私 その後

鈴木理枝

「ハーディと私」について書かせていただいたのは、資料を見ると、14年前であった。時間の速さを感じる今日この頃である。

当時はハーディの詩の文体に興味があり、時制、代名詞、助動詞、名詞句、動詞句、節の構造等、文法分析を試みていたことが思い出される。ハーディの文法的選択が詩の意味にどのような影響を与えているか非常に興味があった。Carter R. (1993) がハーディの文法使用はパターン化しており、普遍的で統制されていることを認識すると言っている。詩の分析を通して、ハーディが当時のキリスト教信仰の確立された道徳観の間で悩み、過去の確実性（宗教的価値観の確立）の消えゆく世界、つまり、宗教的、道徳的世界と現在の不確実性（価値観の喪失）の狭間で苦し

み、複雑な感情を持って過去を回想していると考察した。

その後、英国の英字新聞のブロードシート判とタブロイド判の文体の比較などをしてきた。数年は新聞分析に夢中になっていたが、自分の中で原点に戻ろうと意識し始めた。

ハーディの短編小説の「妻ゆえに」の文体を、マイケル・ハリデーの選択体系機能分析の動詞の過程構成の分析方法を用い始めた。動詞の過程構成と文学的解釈がどのように関連しているのか非常に興味があった。分析を通して、構成要素の確認ができ、3人の登場人物の関わりの中で語られた言語、語りと会話の基本的仕組みについて考察した。

動詞の過程構成の分析を試みて、仮説に基づき、語りの部分で物質過程と関係過程が非常に多く使用されていることが立証できた。登場人物の経験が言語によって表示され、物質過程を表す構成要素が人間の関わり合いを示し、関係過程の構成要素が意味の繋がりをより一層発展させる要素となっていた。3人の登場人物のそれぞれの会話部分で、仮説で指摘したように、心理過程の意味要素を含む動詞と発言課程の動詞が多く使用されていた。また、心理過程と発言課程の構成要素を分析することにより、登場人物の内面的な確信や感情を理解する手助けとなり、意味の解釈と言語の要素が結合していることが実証された。

次に対人的機能についての分析を試みた。ハリデーの言葉のやり取りの基本的定義は、「与えること」、「要求すること」である。「話すという行為において、話し手は自分自身に特定の発話役割を与え、そうすることで同時に、聴き手に話し手の発話役割を補完する役割を担わせる。」(2001)「与えること」と「要求すること」が、「妻ゆえに」の中の登場人物の間で交わされる会話の中で、どのような比率で使用されているか分析した。その結果、登場人物の基本的やり取りの分析により、対人関係の関係度を見ることができた。まず、結婚前のエミリーとシェイドラックの会話では、「要求する」(demanding)が、エミリーがシェイドラックに対して61%使用されていた。次に結婚後のジョアンナとシェイドラックの会話では、「要求する」の使用度が、ジョアンナがシェイドラックに対して、100%になっていた。社会言語学的立場において、男性の「要求する」が多いと考えられるが、分析の結果、この小説の登場人物の関係度においては、逆の状況が発生していた。

最後に、ジョアンナとエミリーの会話においては、エミリーからジョアンナに対して、62%の使用度になっていた。当初、エミリーとジョアンナの分析においては、気の強いジョアンナの発話において、「要求する」度合いが多いと推察したが、分析結果によると、エミリーの発話において多く「要求する」が使用されている。これは経済的逆転現象の影響と、ジョアンナに対しての憐みの感情から来た発話によると推察する。文学的アプローチと言語学的アプローチの両面から文学を解釈して、より一層深く作家の意図や、登場人物の行為の相互作用が明確になると考えた。

大学時代の卒論で『ダーバヴィル家のテス』を取り上げ、女性の労働について書いた。「労働による女性の自立」、「労働がテスに与えた影響と意義」や「ヴィクトリア朝後期の労働事情」に焦点を当て調べた。テスにとって労働は救いへの道であり、教育の場であった。ハーディは、当時の矛盾した道徳観と資本主義が台頭し、農村が崩壊していく中で、農村労働の価値観を改めて問い直していると考察した。

今後は、ハリデーの選択体系機能分析を用い、テスとアレック、テスとエンジェルの会話分析を、原点に戻り言語学的見地より解釈してみたいと考えている。それぞれの会話の中で、ハーディの宗教観が3人の登場人物の会話の中でどのように表現されているか分析して、ハーディのキリスト教への考えを再度考察していく。また、言語学的分析と文学的解釈のつながりを調べ、言語と意味の解釈の関連性を見ていきたいと考えている。そしてハーディの言語の特色を分析から見直し、ハーディの言語スタイルの特徴を、長編小説から解釈していきたいと考えている。

ハーディと私

清水 緑

この5年ほど、私は自伝や書簡などからハーディの絵画や文学に対する見解がどのようなものかを調べ、当時としては画期的な絵画思想論を提唱したラスキンの『近代画家論』の絵画論とを見比べ、ハーディの主要作品『帰郷』『キャスターブリッジの町長』『ダーバヴィル家のテス』『日陰者ジュード』『恋の亡霊』の視覚技法を分析してきた。その結果、二人の考え方が類似していることから、一般に言われているラスキンの影響とはどのようなことであるかがおおよそ明らかになった。ハーディはラスキンの絵画論や、そこで称賛されている風景画家ターナー的絵画手法をその思想性を含め、これを文学的手法として作品を描こうとしたのではないかと結論に至った。それらの研究を通してハーディの素晴らしさ、偉大さに触れることができ、英国のヴィクトリア時代についての興味がわくようになった。

それまでは、彼の作品を読む際には、作品の中で言及されている多くの画家や絵画もそれほど深く考えず読んでいた。以前から私自身も絵を見ることは大好きであったが、イタリア、フランス、ベルギーやオランダなどの絵画がその大部分を占めていた。今回のハーディと絵画の研究を通して、私の頭の中に特にヴィクトリア朝時代の英国絵画に対しての新たな世界が開けたように思う。ターナーやコンスタブルが英国の代表的な風景画家であるといった程度の認識は、ターナーについては完全に覆された。一昨年には日本でターナー展、昨年と今年にはラファエロ前派展が開催され、絵画展に行くこともハーディ研究の重要な一環となったことは喜びとなった。また、ハーディ小説は英国のドーセットを舞台とする地域小説でありながら、ハーディは人間の普遍的な問題を問いかける作家であるというあいまいな認識だったが、この研究を通しハーディという作家、作品、そこに込められた世界観が具体的な形をとるようになった。

私の修士論文はハーディの短編小説“Life's Little Ironies”, *Wessex Tales*における分詞構文についてであるが、ここでは構文独特の形態が物語の進行と場面の描写で様々に使い分けられていた。その後、機会に恵まれ、当時最先端の言語研究の場UCLAで言語学を学ぶことが出来た。言語学の基礎、理論と実践を徹底的に学び、修士課程修了後帰国し、大学で教え現在に至っている。言語の研究では言語資料が欠かせないが、論文作成に必要な言語資料提供者、インフォーマントを探すことも難しく、当時はコーパスもなく、再び言語資料としてハーディの作品を研究対象とすることにした。他の作家も数編取り上げたが、言語の多様性という点ではハーディが一番のように思われた。デヴィッド・ロッジがハーディ作品は映画的と評しているが、これは一つにはハーディが英語をその特徴を含めて最大限に駆使しているからである。短編小説から長編小説を扱うようになり、統語論（文法）意味論から談話分析、語用論、小説の言語へと言語研究の対象として常にハーディ作品があった。

これらの研究の過程でトニー・タナーの『テス』における赤色の持つ意味についての論文を読み、ハーディ小説の色彩語について意味論とハリディなどが提唱する言語の結束作用（cohesion）の視点から『テス』と『キャスターブリッジの町長』の色彩語の意味と分布の分析を行った。その結果、色彩が作品の内容と有機的な関係があることが明らかになった。

このように、ハーディの小説には言語研究の対象としても面白い言語現象が尽きないほどあることが研究を継続できた一つの理由である。またハーディ学会や19世紀英文学研究会の存在も重要であった。ハーディについての研究を継続するうえで、定期的にハーディの様々な側面に触れることが出来てとてもよい刺激になるからである。

しかし、言語を専門とする私にとり、ハーディ研究の先輩や先生方のアドバイスやご指導なくしてハーディとの関係はあくまで‘ハーディの言語と私’でしかなかったと思う。絵画という接点から、ハーディやハーディ研究が言語とは全く異なった面白さを持つようになった。19世紀英文学研究会で初めて研究発表をした時に那須正吾先生が「色彩語は面白いですよ。」と仰ってくださいならなかったら、また玉井暲先生による研究の方向性についての丁寧なご指導がなければ、このようなハーディの世界が目の前に開けることはなかったと思う。

このハーディの新たな世界は私にとって新鮮であり、この新しい視点からのハーディ研究をさらに深めてゆく作業も残っている。それらの試みを積み重ねることによって、本当のハーディ像に少しずつ近づくことができると考えている。

第58回大会印象記

土屋結城

日本ハーディ協会第58回大会は、2015年11月28日（土）、小林千春氏のお世話により、戸板女子短期大学607教室において開催された。まず庶務委員長である渡千鶴子氏により開会の辞が述べられ、その後午前の部で3名の研究発表が行われた。

最初に、坂田薫子氏の司会のもと、田口秀樹氏と今村紅子氏の発表が行われた。田口氏は「今を生きるハーディの小説—苦難と共に—」と題して、ハーディの小説における“live”と“hard”という語の用いられ方から、逆境に置かれた登場人物たちが自分の運命を真摯に受け入れるさまを考察された。ハーディの作品では困難から身を守ろうとし、もがきながら生きる人物たちが登場するが、ハーディの小説14作品を調査した結果、この2語が特に *Desperate Remedies* や *Jude the Obscure* に多く見られる点を指摘された。そしてこれらの作品の人物たちが置かれた状況がいかに現代の人々が置かれている状況と似ているかを論じ、読者はハーディが描く人物たちを自分自身と照らし合わせることにより、新たなアイデンティティを見出すことができ、そこにインターネットの普及、グローバル化などでさまざまな変革にさらされる現在の読者が文学を読む意義があると結論づけられた。

今村氏は「行動するヒロインと帰郷者の誤算—牧歌的ロマンスから田園の悲劇へ、『帰郷』再読」と題し、ユーステイシアの存在を新たな視座から考察された。『帰郷』はギリシャ悲劇の三一致の法則を盛り込んだ意欲作である上に、クリムの姿はオイディプス的であり、実際に盲目になるだけでなく、母親との関係に固執するあまり視野狭窄に陥っているという比喩的な意味でも盲目的である。本作品の全知の語りはユーステイシアの死の真相を回避する曖昧な語りであり、ユーステイシアが最後に自分の人生をコントロールできたのかどうか曖昧さが残るが、ギリシャ悲劇を背景とする舞台設定により、感情的にも理性的にも行動するヒロインとしてユーステイシアの悲劇を壮大に描くことに成功したと論じられた。

続いて、宮崎隆義氏の司会のもと、鈴木淳氏の発表が行われた。「他者の願望のプロットとモノマニアの主人公—ブラッドンを通してハーディ小説のセンセーション小説的要素を考察する—」と題して、『テス』をブラッドンの *Lady Audley's Secret* と比較することにより、テスが他者の願望を生きている可能性について論じた。鈴木氏はまず *Lady Audley's Secret* のプロットを検討することにより、ロバートを動かしているのは、下層階級の野心と金銭的欲求である点を指

摘し、その観点から『テス』のプロットを検討した。ダーバヴィル家をめぐる因果応報を必ずしも語り手は是認していない点に注目し、テスの物語は母ジョーンの欲望により動かされていると指摘した。しかし、最終的にはテスが犯した殺人により、物語は因果応報のプロットに組み込まれる、すなわち、テスはそのセクシュアリティによりジョーンのプロットを覆したと言えるのであると結ばれた。

昼食をはさみ、午後の部は並木幸充氏の司会により総会が行われ、会則の改定などが報告された。

その後、三人の講師により「『ジュード』再読」と題されたシンポジウムが行われた。最初に唐戸信嘉氏が「『儀文は殺す』—*Jude the Obscure*と古典学」と題して、19世紀の古典学との関係からの『ジュード』の再読を試みられた。大学入学に必須の教養であったため『ジュード』において古典学への言及はよく見られるが、大学と古典の関係が自明のものであるがゆえにそれらの言及がどのような意味を持つのか研究が及んでいないのではないかとの問題提起をされ、最新の研究を足掛かりにこの問題を考察された。そして、古典学者たちが古典学は万人に開かれていると言いつつも、実際は富裕層のみを受け入れていた排他的な集団であった点、彼らが国教会の権威を保つために、歴史をねじまげて都合よく解釈する方法を担っていた点を指摘し、ジュードの死は古典学に守られたイギリスの体制との格闘の結果の敗北であるが、古典学のダブル・スタンダード並びに古典学が担ってきた歴史の曲解の事実を逆照射している栄光ある敗北であると言えるものであり、古い体制の崩壊を予告していたと言えるのではないかと結論づけられた。

次に司会の糸多郁子氏は「*Jude the Obscure*とインチキ薬」と題して、『ジュード』においてインチキ薬を売るヴィルバートの役割を19世紀に流行したオペラに見られる惚れ薬、19世紀後半～20世紀初頭に売られたインチキ薬 (patent medicine) と比較し、この比較から、『ジュード』、特にアラベラを新たな視座からとらえ直す可能性について指摘された。19世紀に流行したオペラ『トリスタンとイゾルデ』、『愛の妙薬』に関する考察からは、作品に惚れ薬、インチキ薬が出てくることにより、作品における性の問題や、肉体的魅力を高めたいという欲望が前景化する点を指摘された。次に、patent medicine、特に美容を目的とした専売薬をめぐる言説を検討することにより、労働者階級にも、労働の道具としての身体から見られる身体へという身体観の変化が波及し、労働より美しさ、若さを優先する傾向が見られるようになってくる点を指摘された。そして、これらのコンテクスト並びに労働者階級の出生率の高さが危惧されていた時代背景からアラベラ像を考察すると、酒飲み、無教養といった退化の兆候を示している労働者階級のアラベラが薬の力を借りて結婚し子を作り、その子がスーとジュードの子を殺害し自殺するというプロットが新たな意味を帯びること、さらにこのプロットを通し、労働者階級の性に対する国家的管理の問題まで見えてくる点を指摘された。

最後に、深澤俊氏は「*Jude the Obscure*の作品構造」と題し、『ジュード』が形式を整えられた小説である一方で、近代リアリズム小説の枠にはおさまらない要素も備えている点について考察された。作品にはメアリーグリーンで始まってメアリーグリーンで終わるプロット、アラベラから始まってアラベラに戻るジュードの行動など時間的、地理的対称性を意識した構成が見られる点、恵まれた人物と恵まれない人物の対立、自然なものと法的・社会慣習的なものとの対立が描かれるなど、形式的には整えられていると言える。特に自然なものと法的・社会慣習的なものとの対立構図は、スーとジュードの関係、すなわち自由な感覚から表出する自然な状態の結婚と法律・社会慣習による承認との兼ね合いをめぐる葛藤に通底している複雑で大きな問題である。このようにプロットにおいては対称性を意識した構成が中心に据えられ、形式が整えられている一方で、リトル・ファーザー・タイムのようなリアリズム小説の枠組みからははずれるような人物も描かれる。このような要素から考察を進めると、ハーディはシェリーのもの、すなわち、より崇高なものを純粹に求め、突き進むことができる世界を描きたかったのではないかと、しかし経

済的に衰退している当時のイギリスにおいて純粋に理想を描くのは難しくなっていたため、自身が追い求めるシェリーのものとリアリズム小説の手法との折り合いをなんとかつけようと苦心した作品、それが『ジュード』なのではないかと論じられた。そして、ハーディは『ジュード』以後、詩の世界に移行し、シェリーのな明るい世界はもう失われてしまったと言わんばかりの作品を書くようになるのではないかと結ばれた。

シンポジウムの後、玉井暉氏の司会のもと、「トマス・ハーディ『テス』と田園主義的イングリッシュネス」と題して、丹治愛氏による特別講演が行われた。1880年代、ウィリアム・モリスがケルムスコット・プレスを始めたころから、田園主義的イギリスの典型としてコッツウォルズが発見される。産業革命の結果、生産の中心は南部から北部へ移り、北も南もイングランドを代表するようになったが、例えばギシングの『ヘンリー・ライクロフトの私記』の描写に見られるように、南部にこそイングランドの本来の価値があり、そこにこそ真正正銘のイングランドがあると考えられるようになった。この文脈に即して考えると、ハーディが描くウェセックスの風景はゆるやかな丘陵、白亜の崖壁といった地形のみならず、メイポール・ダンスのような伝統を保持しているという点においても田園的イングリッシュネスを体現している。さらに、ポーア戦争後のLittle Englandismという概念も重要である。チャールズ・マスタマン等の自由主義者のグループは帝国主義に代わる選択肢として、イングランドへの愛を「愛国主義」として提唱した。ただしこの「愛国主義」の対象は田園に限定されるものであったことに注意が必要であると同時に、これがキプリングの発言に見られるように、結局帝国主義的な愛国心に利用されることになる点にも注意が必要である。では、ハーディの描く作品は、帝国主義の屋台骨となるイングリッシュネス形成に関わったと言えるのだろうか。「鼓手ホッジ」をルパート・ブルックの「兵士」と比較してみると、類似しているように見えるが、ブルックの兵士の精神はイングランドに送り返されるのに対して、ハーディのホッジの精神がイングランドに送り返されることはない。その意味において、ハーディが帝国主義的イングリッシュネスを称揚していると結論づけることはできない。ここで『テス』について考えてみると、『テス』の世界は偶然が支配する世界であり、その意味においてハーディの作品を自然主義とみなすことができる。そして、ハーディが描く社会的、自然主義的世界の背後には唯物論的な視点があり、彼が描く世界とは田園的な風景の背後にダーウィニズムが潜んでいるという二重写しの世界である。ハーディが描く田園的イングリッシュネスには相反する2つのベクトル、つまりイングリッシュネスを構築すると同時にそれを解体する方向性も内包されているのである。牧歌的世界を構築しつつも、ナショナルスティックなものを暴露する20世紀的まなざしが潜んでいたと言えるのであると結ばれた。

すべてのプログラムが終了し、新妻会長が閉会の辞を述べられた後、会場近くのセレスティンホテル内レストラン「グランクロス」に会場を移し、懇親会が和やかに開かれた。このように充実した大会の運営にご尽力下さった戸板女子短期大学および協会事務局の皆様にお礼を申し上げます。

J.B.Bullen教授特別講演梗概

九州ハーディ研究会では、J.B.Bullenレディング大学名誉教授の訪日の折、2015年11月9日に西南学院大学にてセミナーを開き、ハーディについてお話し頂いた。以下はそのときの内容をBullen先生ご本人にお願いして、要約していただいたものである。(文責：金子幸男)

The sense of place was hugely important to Hardy, and he could only write well out of places he knew. He was not, however, a realist or topographical novelist. Instead he selected specific locations and transformed them through the lens of narrative, myth, painting and music. So he was what might be called a 'transformative' novelist. When Hardy wrote *Tess of the d'Urbervilles* he was fascinated by recent ideas in anthropology and the growing science of Victorian mythography both of which attempted to interpret Christianity in terms of the archetypes of world religions and developments out of primitive religious beliefs. Many of these beliefs Hardy found still alive in his native Dorset, so at the heart of the novel the story circulates around four Dorset locations - four locations that correspond with discreet phases of Tess's life. But bare ideas did not make a novel, and in order to make his reader feel and see Hardy turned to the world of art. He had had an interest in the visual arts ever since he trained as an architectural draughtsman, but just before writing *Tess* he became passionately interested in the paintings of one of Britain's finest artists J. W. M. Turner. Turner specialised in landscapes of a visionary kind and in his work Hardy created a resonance with his own treatment of landscape in the novels.

The talk began by pointing out the ways in which Hardy examined the topography of *Tess of the d'Urbervilles* in conjunction with a present from his friend Edward Clodd of Frazer's *Golden Bough* (1890). This famous study opens with Frazer linking his own mythographical activities with the painting of Turner. In the late 1880s Hardy's passion for Turner was fuelled by a large retrospective exhibition at the Royal Academy in London, and it is possible that the early scenes of 'club walking' at Marlott draw on a combination of Hardy's love of Turner's *Golden Bough* and his reading in anthropological literature like that of Clodd's. Above all these early episodes announce one of the overarching themes of the novel-the connection between the human life cycle and the trajectory of the sun in the sky exemplified in ancient solar religions.

The next phase of Tess's life in Chaseborough and 'The Slopes' also has associations with Turner's painting. Hardy likens the important peasant-dancing scene in the hay trusser's barn to a pagan orgy with strong overtones from the legend of Bacchus and Ariadne. Not only does the lighting reflect very precisely what Hardy wrote about Turner, the situation between Tess and Alec d'Urberville has distinct parallels with the legend of Ariadne discovered by Bacchus on Naxos.

With Tess's return to Marlott the solarism of the novel rises into greater prominence. Hardy identifies the August sunrise with the solar deity Apollo, together with hints that he is both a healing and destructive god. Mythographers like Max Müller in *Comparative Mythology* (1856) and George Cox in *An Introduction to Mythology* wrote of how solarism lay at the root of many ancient religions, and they identified sunrise and sunset, the passage of the sun through the sky with the beginnings, development and extinction of human love. Love awaits Tess in the Valley of the Frome where she goes after the death of her child by Alec d'Urberville. Deciding to make a fresh start in her life, she chooses the beginning of the solar year-Spring time - to make her journey to what she hopes will be a Promised Land. Dawn, associated with the beginning of love, is the time of day that her intimacy with Angel Clare begins. Christian

and pagan imagery mingle in the Turnerian misty light of the water meadows, and it is in the meadows around the Talbothays that the couple begin to fall in love. This affection is marked by moments of particular intensity. One of these is an episode on an evening in June when Angel takes his harp to play in the open air. Tess approaches through the wild garden and is mesmerised by his performance. The scene conjures parallels with the orgy in Chaseborough. In both of them music plays a prominent role, and in both the fertilizing power of pollen is invoked as a stimulant to sexual excitement. But what in Chaseborough was figured as a Dionysian event now has Apollonian overtones. Apollo, like Angel Clare, was a harp-player and herdsman, but what Tess fails to notice is that, unlike the original deity, Angel is a weak counterpart: one who plays a second-hand harp and whose performance is, in any case, a weak one. Nevertheless as the summer comes on, and the sun increases in its power, the sexual attraction between the couple reaches a fever pitch. Tess now begins to worship Angel, as men once worshipped the god Apollo, and her pleasure in Angel reaches its zenith when the couple agree to marry. Once again the pagan and the Christian are linked by Hardy when on Tess's wedding day her view of Angel is likened to St John's vision of the Angel of God in the Book of Revelation. Not far from Hardy's mind must have been Turner's brilliant and mystical representation of this vision in a picture that he knew well from his visits to the National Gallery. Yet the wedding day has solar implications of which neither Angel nor Tess are aware. It is the last day of the year. The solar year is nearly over, and the sinking sun is losing its power. This nadir is registered in their honeymoon night at Wellbridge. Angel Clare's weak conservatism and his unthinking subscription to Victorian moral orthodoxies force him to reject his new wife. As nineteenth-century mythographers pointed out, the death of the year and the loss of the sun was the equivalent of the extinction of human love so Angel leaves Tess, and like the sun itself, flies away westward to a new life in Brazil. Tess, meanwhile, takes up residence in Flintcombe-Ash, a 'starve acre' place. It is winter; the land is cold, treeless and exposed. The sun disappears from the text of the novel just as Angel has left the narrative. The subsequent events of the story are well known, and in the fullness of time Angel returns to England to seek Tess out, only to find that she is now living with Alec as his mistress. In order to escape she murders him, and joining Angel the couple make a headlong dash across the countryside in a vain attempt to avoid arrest. In the darkness of the hours of the early morning they find themselves at Stonehenge on Salisbury Plain, and once again both music and the solar pattern re-assert themselves. Angel remarks that the sound of the wind blowing through the stones of the great monument resemble the notes of a harp, conjuring up other musical episodes in the novel. Solarism, however, is powerfully prominent in the moment that Tess lies on the stone of sacrifice waiting for the sun to rise—a gesture that anticipates her own imminent execution. Turner painted Stonehenge on a number of occasions, and Hardy had recently seen one of those versions on the walls of the Royal Academy in 1889.

The whole event is unusual in Hardy's work in its ritualistic gestures, emotional stylisation and references to music that it seems to bear a close resemblance to melodrama and even opera. In fact it might be possible to identify the very opera Hardy had in mind for this scene since in the 1880s he had been attending performances of the work of Richard Wagner. Parts of Wagner's opera *Die Valküre* had been played in London, and most frequently one of the

final moments in which Wotan bids farewell to Brünhilde. In the opera, Wotan's beloved Brünhilde has violated the laws of the Gods, and she has to pay the price in her eternal separation from him. In the novel, Angel's beloved, Tess, has violated the laws of the state and similarly has to pay the price of eternal separation. In both cases, Wotan and Angel lay Brünhilde and Tess respectively on an altar for their final farewell.

Tess of the d'Urbervilles draws powerfully on the anthropology of solarism in the way it aligns the trajectory of the love of Angel Clare and Tess with the dawn, noontide and sunset, and with the waxing and waning of the power of the sun in the course of the solar year. For its visual effects it repeatedly creates reminiscences of paintings by Hardy's favourite British artist J.W.M. Turner, and at its climax invokes an opera by Richard Wagner. These two great artists were linked in Hardy's mind. In 1906 he said that he preferred 'late Wagner as he preferred late Turner'. *Tess of the d'Urbervilles* is also one of Hardy's late works, and can be seen to take its place as a work of European genius beside that of Wagner and Turner.



事務局よりのお知らせ

会費納入について

今年度の会費納入をお願いいたします。会計年度は4月から翌年3月までで、年会費は4,000円です（学生・大学院生は年1,000円です）。当協会の会費は、長年にわたって値上げをしておりません。ほかに維持会費として、任意の一口1,000円のご寄付をいただいています。とくに、役員の方は、ご協力いただけると幸いです。なお、顧問の先生は、一般会費のお支払いは不要です。

なお、会費が3年間滞納になりますと、退会扱いになりますのでご注意ください。

日本ハーディ協会の振替口座番号は00120 - 5 - 95275です。会費は、郵便局からお振込みください。同封の振替用紙をご利用の場合は、手数料をお支払いいただく必要はありません。よろしくをお願いいたします。

次回大会について（研究発表募集）

次回第59回大会は、今年の11月5日（土）に、同志社大学今出川キャンパス（京都府京都市上京区今出川通烏丸東入）にて開催されます。研究発表にご応募の方は4月30日までに、①発表要旨：日本語で発表される場合は600字程度、英語で発表される場合は150語程度、②カバーレター：発表タイトル、お名前、所属大学・機関、身分、連絡先（メール・アドレスを含む）を記した用紙、③略歴表、の三つを、郵便または電子メールにて協会事務局までお送りください。発表時間は25分で、ほかに5分程度の質問時間を設けます。簡単な審査のうえ、ご依頼いたします。多数のご応募をいただけますよう、ご期待申し上げます。

今回の大会でも特別講演とシンポジウムを予定しております。特別講演の講師は、那須雅吾先生です。演題は、現時点では、仮題として、「トマス・ハーディとともに五十年—新たな視点から新たなハーディを求めて—」を予定しております。ハーディについての長年のご研究とご愛着について、興味深いご講演を拝聴できるものと楽しみにいたしております。

シンポジウムは、風間末起子先生が中心になって、ご準備いただいております。ご発言者等の詳細は次号の協会ニュースでお知らせいたします。

《内外ニュース》

会員の訃報：

2015年11月24日、井出弘之先生（東京都立大学名誉教授）がご逝去されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

ハーディに関する講演会：

2015年7月18日に、福岡大学に於いて、玉井暉氏による「The Trumpet-Majorをどう読むべきか」と題する講演会があった。

2016年1月23日（土）関西大学に於いて、豊田昌倫氏（京都大学と関西外国語大学の名誉教授）による「小説の文体指標としての伝達部」と題する講演会があった。

《編集後記》

故井出弘之先生は、「日本ハーディ協会」の運営と発展に長年ご尽力下さいました。ヴィクトリア朝文学に造詣が深く、多数の論文、論考、翻訳などがありますが、代表的なご著書として、『ハーディ文学は何処から来たか 伝承バラッド、英国性、そして笑い』（音羽書房鶴見書店、2009年）が挙げられます。井出先生の死を悼み、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

表紙の写真のWightwick Manorはイギリスのウルヴァハンプトンから3マイル程行った所にあります。いかめしい門扉もなく、入り口は質素な佇まいですが、見事なイチイの垣根があり、8月上旬に訪れた際は、庭は薔薇とラベンダーの良い香りが立ち込めていました。この邸宅のもとの質素な住居は17世紀に建設されたと言われています。その後持ち主が変わり、1887年、Theodore Mander（1853-1900）によって、買い取られ、1890年代に現在の邸宅が建てられました。マンダー家は古くからあるニス、ペイント、印刷用のインクなどの製造業者でした。初代のThomas Manderがウルヴァハンプトンにやってきた18世紀半ばには既にその町は、ニスを塗布した鉄板や紙製品を生産する先端的な中心都市となっていたようです。1889年Theodore Manderは市長になり、1900年にはthe Duke and Duchess of York（後の King George V and Queen Mary）の訪問を受けるまでになりました。屋内の造りや調度品は落ち着いた色合いで、ウィリアム・モリス調の室内装飾で、外から想像するよりも良かったです。特に、ラファエロ前派のコレクションが見応えがあります。

今回編集委員として初めての仕事で慣れないことも多かったのですが、前任者の先生方や事務局の先生方のサポートを得て、何とかここまでこぎつけました。ご多忙の中、玉稿をお寄せ頂きました執筆者の方々のご協力、中央大学生協印刷部の藤様のご尽力に、心からお礼申し上げます。次号は9月発行予定で、原稿締め切りは7月10日です。論文、随筆は2000字程度、短信、個人消息は500字程度です。皆様、奮ってご寄稿ください。尚、ハーディに関する著書、翻訳は編集者までご連絡ください。お待ちしております。